

2011年度

科目名	日本文学史Ⅳ				
担当教員	高橋 圭一				
配当	日文2		コード	31014	
開期	前期	講時	水曜日1限	単位数	2
授業テーマ	近世中期の文学、天明文文学を読む。				
目的と概要	近世前期の元禄文学は講読で西鶴を読んでいる。近世後期、化政文学は馬琴の読本に代表されるように長編が多く、講義で取り上げるには不向きである。中期の文学は短編が主流でバラエティーにも富んでおり、講義で紹介するにはうってつけである。また、近世文学の最も近世らしいところが、この時代の作品には集約されている。表現第一主義の凝った文学、天明文文学を味読する。				
成績評価法	授業終了時の試験(80%)に、平常点(20%)を加味する。				
テキスト	プリントを配布する。				
参考書	講義中、随時紹介する。				
履修に当たっ ての注意・助言 /準備学習	200年以上前に書かれた作品を読んで理解すること、とりわけ笑うことは、相当に難しい。試験前に大急ぎでプリントを読んでも、おそらくちんぷんかんぷんであろう。講義で一作品を読み終えた後は、帰宅後必ず一度音読してみること。				
講義計画					
第1回	天明文文学概説。それは「お江戸」で誕生した。				
第2回	続き。日野龍夫氏の文章を読む。				
第3回	続き。天明文文学の先駆者、平賀源内（風来山人）について。				
第4回	和歌のパロディ狂歌について。狂歌が天明文文学の地盤を形成した。				
第5回	続き。四方赤良（大田南畝）の作を中心に。				
第6回	漢詩のパロディ狂詩について。寝惚先生（大田南畝 おおたなんぼ）を中心に。				
第7回	上方の作者である銅脈先生（どうみやくせんせい 畠中観斎）の狂詩の鑑賞。				
第8回	天明文文学の理論的（？）指導者大田南畝について。				
第9回	天明文文学の華、黄表紙について。概説。				
第10回	続き。黄表紙『大悲千禄本』（だいひのせんろっぽん）を読む。				
第11回	天明文文学の粋、洒落本概説。寛政の改革と書肆蔦屋重三郎（つたやじゅうざぶろう）。				
第12回	続き。山東京伝作『傾城買四十八手』を読む。				
第13回	天明文文学の範疇には入らないが、近世中期に著された怪異小説の傑作『雨月物語』を読む。				
第14回	続き。「菊花の約」（きっかのちぎり）を読む。				
第15回	続き。本講義の総括。				